



会創設者「松岡 朝」の「思い」を次世代につなぐ



当会創設者「松岡 朝」の留学時代の写真(1928年頃・ニューヨーク市)

- 目次
- ★「松岡 朝 物語」 (仮称) 第2章 (P2)・第3章 (P9)
 - ★ 10/28(金) チャリティーコンサートのお知らせ

松岡朝物語(仮称) 第2章

文/角山祥道

4

アメリカで学びたい。

松岡朝にこの感情が芽生えたのは、もうひとつの別離がきっかけだった。

長男の健吾が亡くなった松岡家にとって、朝は希望の星だった。姉の啓子はすでに嫁いで家にはいない。結婚し、朝が松岡家を継ぐ。父親の健一も母親の幸も、そのことを信じて疑わなかった。

そんな21歳の朝に、良縁が舞い込む。

お相手は、鈴木雅次という内務省の役人だった。内務大臣といえば内閣の副総理格。この当時、内務省が日本を動かしていたと言える。鈴木雅次は、信州・松本の生まれで、松本中学（現・県立松本深志高校）から八高に進み、九州帝国大学（現・九州大学）で土木工学を学んだ逸材だ。鉄道技師、土木局技術課長、内務技監などの要職を経て、戦後すぐに、日本大学工学部教授となり、のちに日本土木学会、日本港湾協会、港湾審議会などの会長を歴任した土木学会の大物である。のちに紫綬褒章や文化勲章を受けたことでも大物ぶりがわかる。

余談だが、旧制八高とは現在の名古屋大学のことで、一高から八高まで、俗に「ナンバースクール」と呼ぶ。一高（東京大学）、二高（東北大学）、三高（京都大学）、四高（金沢大学）、五高（熊本大学）、六高（岡山大学）、七高（鹿児島大学）……とそうそうたる学校が並ぶ。政官界の人材の供給先であり、ここからさらに、各地の帝国大学に進む者が多かった。



1912年3月 朝 18才



才媛と才子の結婚である。誰もがお似合いと思ひ、本人たちもこの結婚に不満をいいていなかった。雅次の仕事からみて、霞ヶ浦（茨城県）に新居を構え、夫婦仲良く将棋をさしたりと、仲睦い暮らしを送っていた。だがこうした生活は長く続かなかった。

松岡家は、最初から婿養子に迎えたつもりだった。それもあって、鈴木雅次の実家に多額の融通もした。だがそのことに納得していない人間がいた。雅次の母親だ。信州から上京してきた雅次の

母親が、新居に乗り込んできたのだ。結果として養子の約束は不履行になってしまった。それは、松岡家からしてみれば、大きなボタンのかけ違いだった。朝の結婚自体が、松岡家を存続させるという意味合いがあったからだ。

結局、若い二人の幸せな時間は、東の間と終わった。二人の中は切り裂かれてしまったのである。

1918年（大正7）——。それは奇しくも第一次世界大戦が終結した年だった。

5

あまりの理不尽さに、朝は、鈴木雅次と過ごした時間と同じぶんだけ、泣いて暮らした。社会は大きく動き出していたが、それと反比例するかのように、朝の生来の活発さは影を潜めた。そして朝は、結婚と離婚の事実を恥と思い、心の中に封印してしまった。以後、朝は、「自分は未婚である」と通し続けた。

第一次世界大戦が終結した1918年（大正7）は、朝の身の回りだけでなく、あらゆることが動き出した年だった。松下幸之助は二股ソケットを売り出し、のちの松下電器産業（現・パナソニック）の礎を築く。鈴木三重吉は「赤い鳥」を創刊し、武者小路実篤は宮崎県に「新しき村」を建設した。文学者たちもまた、激動の中にあって、新しい時代を切り開かんとしていた。

翌1919年になると、朝鮮半島では三・一独立運動、中国では五・四運動が始まり、日本の隣国は、反日感情を高めていく。

1920年になると、日本で株価が大暴落し、戦後恐慌が起こる。平塚らいてうや市川房枝らが新婦人協会を結成するなど、女性たちの自立の芽吹きも見られ始めるが、翌1921年になると、原敬首相が東京駅で暗殺されるという事件が起こる。時代は動き始めていたが、誰もその行き先を知らなかった。

朝は時代に背を向け、悲しみの中に沈んでいたが、時代と無関係の場所にいたのは、朝だけではない。母の幸もまた、「娘の幸せ」しか見ようとしていなかった。幸は、朝の幸福——結婚を諦めていなかった。仲人に頼み込んで、若い男性の写真を手に入れ、朝に見せた。結婚こそが女の幸せと信じて疑わなかった母・幸にとっては、結婚適齢期の20代の女性が、結婚を選択しないということが想像できなかつたのだ。

離婚からの3年間で、一生ぶんの涙を流した朝は、ようやく自らの歩みを進める。学ぶことに人生の意義を見出そうとしたのだ。それはかつての朝の夢だった。

朝は結婚する直前、1914年に女子英学塾で学んでいた。

女子英学塾は、津田梅子が開いた女性の高等教育を目指す私塾だ。大正時代の日本は、女子の教育といっても「良妻賢母」を目指すばかりで、女性の自立を望んではいなかった。だが梅子は、「自ら学び、考え、行動せよ」と、日本の若き女性たちに英語を中心に高度な教育を施した。現在の津田塾大学の前身である。朝はこの本科生として1年学んでいたのである。

離婚し、ひとりになったことで、朝のかつての夢がむくむくと頭をもたげた。

「アメリカで勉強して能力を伸ばしたい。そして、困っている人々を援助したい」

だが、その思いは、母・幸には理解できなかつた。

なぜ女の幸せを無碍にするのか。なぜ結婚から目を背けるのか。

朝にとって、アメリカ行きは至極当然の感情だった。そもそも、最初の結婚は家同士のいざこざでご破算になっている。そこには「自分の意思」はまったくない。顧みられることもなかつた。では、朝と同じように、経済省の役人と見合い結婚した姉・啓子はどうか。朝から見るかぎり、それほど幸せそうには思えなかつた。

今、母の勧めでお見合い結婚をしたとして、それは幸せをもたらすのだろうか。朝は疑問だった。母のように、あるいは姉のように、彼女たちが伝統と信じる女の生涯に甘んじて、自分はきっと満足できないに違いない。

「自ら学び、考え、行動せよ」

津田梅子先生の言葉が、朝の中にこだました。

朝のアメリカ行きの決意とは裏腹に、母・幸は大いに弱った。結婚以外の価値観を持たなかった幸は、朝を持て余したのである。

「いったいどうしたらいいでしょう」

母・幸は、古くからの家族ぐるみで付き合いのあった旧友に、助言を請うた。

「娘さんの胸のうちには、観音さまの慈悲の心が宿っているのではないのでしょうか。他の人々を助けるのは、娘さんの運命です。彼女が、自分自身を見つけるために、海の向こう側に行かせてあげべきだと思いますよ」

朝は戦後、ブリヂストンの創業者、石橋正二郎氏はじめ、企業家や各界の重鎮とよしみを結ぶが、彼ら男性リーダーたちは、朝に会って人となりを知ると一様に、

「あなたは男性に生まれればよかった！」

と嘆息した。戦後十数年経ってもまだ、女性が社会の中で意志を持って生きることは珍しいことであり、難しいことだった。

朝が生きた大正時代は、のちに「大正デモクラシー」と名づけられた自由を謳歌した時代であり、街には、山高帽子にセーラーパンツという「モボ（モダン・ボーイ）」、アッパッパと呼ばれた木綿のワンピースにクロッシェ（釣鐘型の帽子）をあしらえた「モガ（モダン・ガール）」が溢れかえっていたが、それでも女性の自立となると話は別だった。ましてや、朝が望んでいたことは「アメリカで学ぶ」ことだったのである。母・幸が、かたくなに朝を引き留めようとしたことは、無理もないことだった。

母・幸が朝の行動に気を揉む一方で、父・健一はずっと朝を応援していたフシがある。

健一は、幼少時に高野山に預けられたこともあり、生涯にわたって真言宗に帰依していたが、一方で、アメリカ人宣教師に英語を教わった経験から、「男女平等は神からの贈り物である」と信じていた。健一は、アメリカ人のバラ宣教師から学んだ日本人の第一世代だった。もし長男の健吾が、「アメリカで学びたい」と言ってきたらどうするか。はたして反対したのだろうか。そう考えると、朝を日本に留め置くべき理由は健一に見当たらなかった。

その代わりに、健一は朝に1冊の手帳を手渡した。

それは、縞子（サテン）に浮き模様を織り出した織物（ブローケード）で、美しく装幀された薄い1冊の手帳だった。中を開くと、前書きに始まり、28もの箴言が、健一の達筆な文字で記されていた。そこには、感受性豊かな文章で、朝が異国の地でどう生きるべきか、どのように生活を進めるべきか、そうしたことがしたためてあったのである。健一は朝の出発に合わせて、3か月以上も前から準備をしていたのだ。

〈本国日本を離れたら体を大切に健康第一とする〉

〈持っている金銭を大切に、その一銭を失うごとに自分の身内を失っていくと同じだと思わないさい〉

朝にとってこの手帳は、文字通り宝物となった。朝は、いつも肌身離さず持ち歩き、何かあると諳んじ、心を落ち着けた。

朝は大洋丸でアメリカへ渡った。

母・幸の不安を少しでも和らげるために、父の知り合いの在日アメリカ人宣教師、フレッド・E・ヘイゲン先生の夫人に付き添ってもらうことになった。社交界に初めて出る若い女性に付き添う、介添えの女性のことを「シャペロン」と言うが、ヘイゲン夫人は、朝がアメリカ社会にデビューするためのシャペロン——後見人になってくれたのだ。

朝は横浜の港から船に乗り込んだ。初めての船旅、初めての外国だった。

1922年（大正11）。朝は29歳になろうとしていた。

長い船旅だった。海が大荒れの日には、大きなスチーマートランクが部屋の片隅から音を立てて、反対側へと右往左往移動するほどであったが、船旅は終わろうとしていた。

出発から10日以上過ぎていただろうか。朝は、黎明のうちに起き出すと、ひとり、甲板の先端に向かった。ここは朝のお気に入りの場所だった。そこは、自分を空のいちばん近くに置いてくれる場所だった。

日の出前のせいかあたりは仄暗く、誰もいない。鳥の姿さえまだない。

「わたしと、空と、船だけ」

朝は甲板の上に端坐した。姿勢を正して正座をしていると、朝は自分の気分が落ち着いてくるのがわかった。

日の出と共に、ようやく、桑港——サンフランシスコ港が見えてきた。朝の思い焦がれていたアメリカが、今や目の前にあった。

サンフランシスコに着くと、朝の一行は休む間もなく、真東——イリノイ州のエバンストンに向かった。ヘイゲン夫人はたったこのことのためだけに、アメリカ大陸を横断したのだった。朝はヘイゲン夫人とほどなく別れた。

エバンストンはシカゴの郊外、真北に位置する街で、ミシガン湖に面している。エバンストンに向かったのは、ノースウェスタン大学に入学するためだった。日本を出立する前、フレッド・E・ヘイゲン先生は、朝にノースウェスタン大学に学ぶように勧めていた。

ノースウェスタン大学は現在、「中西部のハーバード」と称され、全米で指折りの名門私立大学の地位を保っているが、もともと、1851年にプロテスタント教会のメソジスト派によって始められた大学だ。ここには、米国女性キリスト者禁酒同盟（WCTU）の本部があった。そして何より、フランシス・ウィラードがこの地に、小さな家を構えていた。

アメリカの国議会議事堂には、国立彫像ホール・コレクションという有名な展示場がある。功績のあった人物の栄誉を称えるために各州から寄贈された彫像を飾るスペースで、「アメリカ合衆国建国の父」のひとりである哲学者サミュエル・アダムズや、第34代大統領のアイゼンハワー、政教分離原則の提案者である神学者のロジャー・ウィリアムズなど、アメリカを創り上げた人物の彫像が100体ほど飾られている。

フランシス・ウィラードは、このコレクション——偉大な指導者たちの仲間入りをした初めての女性だった。アメリカ合衆国の女性キリスト者禁酒同盟の会長を終生務めたことでも知られ、女性が「弱い性」であり、誰かに依存することが女性の特質であるという誤った考え方をなくさなければならない、と主張し続けた。当時、アメリカ人男性のアルコール中毒は社会的問題だった。酔った男性は家庭内で暴力的となり、その歪みは、女性を不幸にしていた。女性は男性から自立しなければならない——。ウィラードの運動はやがて、禁酒法（1919年成立）や女性参政権（1920年成立）に繋がっていく。

ヘイゲン先生は、ウィラード女史を敬愛していた。ウィラード女史はすでにこの世にいなかったが、かつて女史が教鞭をとっていたノースウェスタン大学こそ、朝が学ぶのに相応しいと先生は考えたのだ。

7

だが朝にとって、英語は難敵だった。

日本であれほど学んできたはずだったが、大学のクラスの中で英語を聞き取り、理解することは何にもまして困難だった。

英文法を教えてくれていたのは、イギリス出身の男性教師だったが、ある時、彼が醜い姿のゴブリンと幽霊の物語を話してくれた。教師の脱線話に、クラス中が笑い転げているのに、朝だけがひと言も理解できず、ぽかんとしているのだった。

朝はその足で、女性学部長のメリー・ポーター先生のもとに駆け込んだ。そして、たどたどしい英語で頼み込んだ。

「私に英語のチューター（個別家庭教師）をつけていただけませんか？」

ポーター先生が用意してくれた先生は、タッカー先生という初老のレディだった。英語を外国人に教えることが上手で、朝の面倒をととても親切に見てくれた。タッカー先生との個別授業は1年間続き、次第に朝は、英語を苦もなく操れるようになっていった。

朝がノースウェスタン大学に入学した年——1922年（大正11）の冬のクリスマス、ロバート・カニングム夫人が一家の客として朝を招いてくれた。ポーター先生が、帰る場所のない朝のことを考え、手配してくれたのだった。カニングム家は、コロニアル様式の建物で、ベランダの白い円柱が特徴的だった。建物の両側には、美しいフラワーガーデンと芝生が続いている。

このクリスマス・パーティに、カニングム夫人は、朝の他に、約30人の子供たちを招待していた。息子ボビーの友達だ。彼らは本当に無邪気で、幸せそうだった。朝は、ノースウェスタン大学時代のことを思い出すたびに、幸せな気分になることができたが、その思い出と子供たちの快活な笑顔は、見事に重なっている。



カニングム夫人と子供たち

翌年——1923年の春に、米国女性キリスト者禁酒同盟（WCTU）が、朝のために小さなパーティを開いてくれた。その時に朝は初めて、WCTUのアン・ゴードン先生に、フランシス・ウィラード女史の家へ連れていかれた。どの部屋もその時のままで保たれている。朝は、ウィラード女史の書斎に通された。

古い大きな木の机の上に、鉛筆、インクスタンド、ペン皿、消しゴムや紙などが置いてある。まるでついさっきまで、ウィラード女史が使っていたかのようなようだった。アン・ゴードン先生は朝に、椅子に座るように言い、ペンを手にとるように促した。

「さあ、朝、この地でアメリカの良いことをたくさん勉強しなさい。いまウィラード先生の物に触れましたね？ あなた自身の手で。そのことを良く覚えておきなさい」

〈主に信頼し、善を行え。この地に住み着き、信仰を糧とせよ〉（「旧約聖書」詩篇37-1、日本聖書協会）

ウィラード女史は、ノースウェスタン大学で教鞭をとっていた時代に、禁酒運動を始め、それが理由で辞職を余儀なくされている。運動に挫折し、苦悩していた最中、偶然、ホテルに備え付けてあった聖書で目にしたのが、この言葉だった。主に信頼して善を行え——。ウィラード女史はこの言葉に目覚めたのだった。

朝は手が震えた。

朝もまた社会福祉——善のためにこの地にいた。畏れ多いと思いながらも、朝は自分のこれからとウィラード女史の半生とを重ねあわせた。

8

朝にとって、アメリカで学んでいた時期は、人生の最も幸福な時期だった。

「学びたい」という明確な意志を持った朝を、アメリカは好意的に受け入れた。意志を持つ女性を、アメリカは排除しない。むしろ、常に誰かが手を差し伸べてくれるのだ。

関東大震災の時もそうだった。

朝はその時、World Woman's Christian Temperance Union——WWCTU（世界女性キリスト者禁酒同盟）の記念式典に出席するため、オハイオのコロンバスにいた。震災のニュースに驚く朝に対し、出席者たちは、「被災者の役に立つように」と寄付を集めてくれた。その額は1000ドルもの大金になった。

コロンバスでの式典の後、朝はニューヨークへ出向いた。すると、たまたま同宿だったストーン夫人と懇意になり、「コロンビア大学で学んだらどうかしら」と勧めてくれた。朝はその勧めを受け入れ、コロンビア大学のティーチャーズ・スクール（教育学部）の夏季学校で学んだ。朝にとって初めてのニューヨーク長期滞在だった。朝はここで、社会科学の6単位を取得した。

夏季学校のあと、朝はフィラデルフィアへ赴き、サムエル・フレイチャー氏に会った。実は、サムエル氏の2番目の兄、ベンジャミン・フレイチャー氏と朝は知り合いだった。松岡家の横浜の家の近くに、ベンジャミン氏の経営する広告会社があり、朝は家族ぐるみでお付き合いをしていた。その弟のサムエル氏は、フィラデルフィアで大きな紡績工場を営んでおり、慈善家としても広く知られていた。

朝は、サムエル・フレイチャー氏の夕食会に招待された。

そのお礼にと、朝はサムエル氏の居間にあつたピアノの前に座った。曲は、シューベルト「4つの即興曲」（D899）。発表会でいつもとちっていた朝にしては、会心の出来だった。フレイチャー夫人は、「日本の少女がシューベルトを演奏するなんて！」とたいそう驚き、そして喜んでくれた。朝

は、ピアノのレッスンは辛かったことや、それでも稽古のあとに先生がくれる飴玉が楽しみでレッスンを続けていたことを、ひとり懐かしく思い出した。

ピアノの演奏に気をよくしてくれたのか、兄の友人の娘ということが手伝ったのか、サムエル・フレイチャー氏は朝の後見人になることを申し出てくれた。朝は、この申し出をありがたく受け、おかげでペンシルバニア大学附属社会事業専門学校に入学することができた。またしても朝に手を差し伸べてくれる人が現れたのだ。朝はこの学校で2年間、社会福祉の実務を学ぶことになる。

1925年（大正14）6月にペンシルバニア大学附属社会事業専門学校を卒業した朝は、父・健一の勧めでヨーロッパに渡る。スコットランドのエディンバラで行なわれる WWCTU の世界大会に、日本代表として出席せよ、とのことだった。

その船旅で一緒だったのが、ウェンデル・リヴァー夫人だった。リヴァー夫人は有名な眼科医の夫人で、バーナード・カレッジの国際学生会館（寄宿舎）の長も務めていた。厳格な人だったが、親切な方でもあった。朝は船旅の最中、リヴァー夫人と大いに語り合い、すっかり意気投合した。朝は、リヴァー夫人の勧めもあり、ここの寄宿舎から、コロンビア大学傘下の女子大であるバーナード・カレッジに通うことになる。

朝が、バーナード・カレッジに通い始めたある冬のことだ。

大雪の日、朝はベッドの中で布団にくるまりながら考えていた。これが日本なら、母は私に「雪だから学校を休みなさい」と言い、何か温かい飲み物を持ってきてくれるのではないかな。すると、リヴァー夫人が朝の部屋のドアの前までやって来た。だが聞こえてきたのは朝の期待した台詞ではなかった。

「朝、起きて学校へ行きなさい」

朝が朝食を済ますと、リヴァー夫人は続けた。

「牛乳運搬車の轍があるかどうか、門まで行って見てきましょう。かなり幅広の車だから、車輪がつけた跡の中を歩いていけば、駅まで辿り着けるはずですよ」

夫人と外に出ると、雪は50センチ近く積もっていた。朝が夫人を振り返ると、

「あなたの後ろから車が来ないように見張っていてあげますよ」

と笑って手を振り、朝を促した。

「私にはつらいことだけど、夫人がそう言うならその通りにしないといけないわね」と朝は独りごちながら、車輪の跡を追って学校へ行った。

「日本には『かわいい子には旅をさせよ』という諺があるけれど、アメリカも同じね」

やるべきことはどんな状況でもやるということは、朝がリヴァー夫人から教わった美徳のひとつだった。

30歳を過ぎた朝は、ひとり異国の地で、かつての夢だった勉学に没頭していた。だがこの時、父・健一が日本で大変なことになっているとは、朝は知る由もなかった。

(つづく)

松岡朝物語(仮称) 第3章

文/角山祥道

9

朝は、コロンビア大学大学院で学び続ける計画を持っていた。朝の目の前に知の大海は広がっており、そしてその大海の中心に大学院があった。

バーナード・カレッジの寄宿生の女子学生の友人たちと、朝はカレッジの前庭で写真を撮った。卒業のキャップとガウン姿だ。共にたたえ合い、笑いあった。それは賑やかで、騒々しかった。朝は泣き暮らしていた日本での3年間を思い、前に進んでいる現在の幸せを噛みしめた。



1927年6月2日 コロンビア大学(学士) 卒業

卒業式の興奮醒めやらぬまま寄宿舎に戻ると、父・健一からの手紙が朝を待っていた。

それによると、1923年(大正12)の大震災以後、父の事業の状態はどんどん悪くなっていったということだった。銀行は次々と業務を停止し、松岡家のメインバンクだった十五銀行も倒産してしまっていた。父・健一は、アメリカにいる朝を、もうこれ以上、援助することができなくなってしまったのだと正直に告白していた。

朝は、読み続けていくうち手の震えがとまらなくなっていた。目が文字を追えない。開けていたはずの明るい未来が、急に暗転してしまっただった。朝は大きく息を吐き出すと、手紙に目を戻した。

手紙は、次の言葉で結ばれていた。

「でも、私は朝が勉強を諦めて帰国するなどとは考えたくない。朝はもっと勉強を続けたいと望んでいる。そう、私は信じている」

朝は、父と高野山の僧侶との口論を思い出していた。

父・健一は、墓石に刻む日付を、「西暦にしたい」と主張した。僧侶にしてみれば、キリストの誕生年を基準にしている西暦を用いるなど、もつてのほかだ。健一はキリスト教など邪教だと憤る僧侶に向かって、反論をまくし立てた。

「あなたたちこそ考えが狭い。狭量だ。ご自分の寺の範囲を超えた向こう側がまったく見えていない。

もし自分自身の宗教を外部の世界で認めてもらい、もっと広めたいと思うなら、自分たちの信念を超える雅量——大きな心を持つことを学ばれるべきです」

健一は、自分の信念の前に、絶望などしたことがなかった。正しいことは、必ず実現する。この時も結局、健一は僧侶に、墓石に西暦を刻むことを認めさせたのだった。

父は私のことを信じている。私の信念を信じている。

そう思うと、朝の気持ちは軽くなった。

学費なら奨学金でまかなえる。それにきつと、勉強を続ける間の生活費を得る道があるに違いない。

数日間考え、心を整えたのち、朝は自分の持ち物を処分することにした。勉学に帯も宝飾品もいらない。どれも思い出の品であり、辛い決断を伴ったが、朝はもっと勉強を続けたいと望んでいるはずだという父の手紙の言葉が、朝の背中を押した。

朝は手放すにあたって、東洋美術に詳しい知人のブラウン夫人に相談することにした。夫人は東洋美術の著書を持ち、その道の権威のひとりだった。

「こんな美しい品物を手放すなんて、なんてお気の毒なのでしょう」

ブラウン夫人は、朝の美しい着物や金襴の帯、織物、上等の宝飾品などを見て、ため息をついた。しかし夫人は、自分のコネクションを使って、朝の品々を高値で売り捌いてくれた。

1927年（昭和2）の9月。こうして朝は、ニューヨークでの新しい生活を始める。



コロンビア大学 Law Library の前にて

周囲に目を転じれば、生活が一変したのは何も朝ばかりではなかった。

1923年（大正12）9月1日に首都圏を襲った関東大震災は、死者・行方不明者10万人超という未曾有の被害をもたらしたが、影響はそれだけにとどまらなかった。朝鮮人が暴徒化したなどというデマが飛び交い、各地に結成された自警団は、朝鮮人や中国人を集団暴行して回った。殺害された人々の数は、数千とも数万とも言われる。この混乱に乗じて、陸軍の一部は、社会主義や自由主義の指導者の殺害を計画。実際、アナキストの大杉栄や婦人解放運動家の伊藤野枝、労働運動家の平澤計七（けいしち）や川合義虎（よしとら）らが惨殺された。

こうした流れは日本政府にも受け継がれ、震災から2年後の1925年に「治安維持法」が成立する。

以後、政府は言論弾圧を強めていく。翌1926年には大正天皇が崩御し、昭和と改元されるが、震災時の膨大な対外債務と昭和金融恐慌により、日本経済は壊滅的となる。大陸に活路を見出そうとした日本は、第一次山東出兵（1927年）、関東軍による張作霖爆殺事件（1928年）、満州事変（1931年）……と泥沼の戦争へと向かって行く。

おかしくなっていたのは日本だけではない。

ドイツでは、「国家社会主義ドイツ労働者党」（ナチス）が勢いを増し、1921年にはアドルフ・ヒトラーが第一議長（指導者）となっていた。イタリアではベニート・ムッソリーニがファシスト党を結成し、1922年に政権を獲得する。

1926年には蒋介石の「北伐」が始まり、中国は内乱状態へとようになっていく。

朝がいたアメリカでも社会は動き始めていた。白人の中に、「移民に仕事を奪われている」という不満が渦巻き、アメリカ社会は、移民排斥へと舵を切る。1924年、アメリカ連邦議会は、黄色人（日本人）は「帰化不能外国人」であり、帰化権はないとする「排日移民法」を成立させた。

世界は、いつ破裂してもおかしくないような状態だった。あとは誰かが、膨らみきった風船を一差しするだけでよかった。

そんな中、朝の新生活はスタートを切った。

朝はまず、知人の紹介でハワード・マンズフィールド氏を訪ねた。氏は、日本の美術品のコレクターだった。朝は学校が休みの日曜日になると、マンズフィールド宅を訪ね、氏のコレクションの分類整理と鑑定を手伝った。幾ばくかの報酬を得るためだった。

朝の仕事ぶりに満足したマンズフィールド氏は、知人のロックフェラー夫人を紹介してくれた。夫人が、村井吉兵衛（きちべえ）夫人から大量の美術品を購入していることを知っており、「朝をきっと必要としている」と推薦してくれたのだ。

村井吉兵衛は、「煙草王」と呼ばれた日本の実業家で、村井銀行を中心に村井財閥を形成していた。しかし昭和の声を聞く直前に吉兵衛は亡くなり、村井銀行も昭和金融恐慌により破綻してしまった。その結果、村井コレクションの一部が、ロックフェラー夫人の手に渡ったのだ。

朝は1カ月弱、ロックフェラー夫人の元に通った。夫人の自宅の3階には薄暗い部屋があり、たった1本のローソクで照らされた中に、多くの仏像が浮かび上がっていた。部屋には香が焚かれ、まるで日本の古寺のようだった。

朝は、東洋の美術品や武具の分類整理を請け負っては報酬を得ていたが、これは、偶然培った知識が元になっている。

貿易商だった朝の父・健一は、横浜に倉庫をいくつも持っていたが、その倉庫のひとつに、大量の古書が眠っていた。幼少時の朝にとって、この古書は、朝の心を慰めてくれるもののひとつだった。朝は倉庫の窓辺に腰掛けると、窓からの明かりの中で、その古書をパラパラとめくった。朝はその中に、甲冑や古代の武士を描いた絵を見つけ、食い入るように眺めた。そのうちに、絵に添えられた解説文も読むようになり、次第に高度な戦術書も手に取るようになった。朝の中には、知らないうちに膨大なデータベースが形成されていったのである。

父・健一が骨董好きなのも役に立った。家にはしばしば骨董商が訪れ、健一の前でさまざまな品を披露した。朝は父と一緒にその骨董品——絵や壺を眺め、その値段交渉を聞かずとも耳にした。門前の小僧と同じ理屈で、朝は本人が気づかぬうちに、いっばしの目利きになっていた。

まさか20年前のことが、今になって生きてくるとは。

朝は、心の中で父に感謝した。

経験が思わぬところで役に立つように、人の縁もまた、知らないところで繋がっている。

朝がブルックリン美術館を訪ねた時のことだ。その館長のスチュワート・カリン氏と話す機会を得た。朝は、「日本美術に詳しいアメリカ人」を知っているというつもりで、何気なく、フレデリック・スター氏の話を持ち出した。シカゴ大学で人類学を学んだというスター氏は、父・健一のよき友人だった。スター氏は真言宗の熱心な信奉者だったこともあり、高野山で修業したことのある父と話があったのだ。スター氏は来日するたびに松岡家を訪れ、朝ともいろいろなことを話題にした。

「フレデリック・スター先生ですか？」

その名を聞くと、カリン氏は驚いた顔をした。

「私はスター先生の教え子です！」

カリン氏は、フレデリック・スター氏と朝との関係を知り、さらに朝が現在請け負っている仕事の内容を聞くと、「ちょっとお願いしたいことがあるのですが……」と朝をいざなった。カリン氏に連れられていったのは、公開されていない展示室のひとつで、床には中国製の青銅器が散らばっていた。

「これらを2つのケースに収めてください。あとでここへ様子を見に来ますから」

朝はひとつひとつ手に取り、じっくりと調べてから、それぞれをさまざまな年代やスタイルに合わせて棚に並べた。しばらくの間じっと待っているとカリン氏が大またで歩いてきて、朝の並べた青銅器を一瞥した。

「たいへんよろしい。そして美しい。ありがとう」

そしてカリン氏は「助手をちょうど必要としていたところですよ」と喜んだ。

「あなたには1ヵ月100ドルを支払いましょう。でも、あなたの今の住まいからブルックリン美術館に通うなら、ラッシュアワーを避けなければいけませんね。9時30分頃に美術館に来て、4時には帰宅するといいでしょ。そうすれば地下鉄でも座れるでしょうから」

朝は、カリン氏のテストに合格したのだった。生活費を稼がねばならない朝にとって、これは願ってもない申し出だった。

館長のカリン氏のトレードマークは、長いコートに深く被った帽子だった。氏は、人目につく場所で目立つのが好きではなかったのだ。そこで、オークション会場にも、朝をよく連れて行った。自分が前面に立たなくても済むようにするためだ。

「気に入ったものがあるときは、あなたのほうを見ますからね、そうしたらあなたが競売人に頷いて合図を送ってください」

コンビはうまくいった。朝と館長は、素晴らしい品々を手ごろな値段で手に入れた。

館長は、中国の寺院から直接、買い付けることもあった。彼の審美眼(鑑識力)はずば抜けていたので、中国の古い美術品が多数、ブルックリン美術館にあった。朝はすぐに、カリン館長から、それらの整理をまかされた。

朝の仕事ぶりに満足したカリン館長は、次に、中世日本の甲冑、武具などの分類整理を依頼した。美術館には、甲冑、武具の壮大かつさまざまな種類のコレクションがあった。

例えば、顔を覆って保護する覆面防具は3種類のタイプがある。両頬だけを覆うツバメの形をしたもの、目の下の顔半分を覆うデザイン、そして顔全体をかくすタイプである。これを詳細に分類整理するには、膨大な知識と根気が必要だった。朝は古い武器や戦術についての書籍を集め、読み込んだ。それを元に、コレクションを整理し、甲冑のセットを再現した。

整理を終えた朝は、カリン氏に報告した。館長は朝の仕事を確認すると、深く被っていた帽子を大袈裟に投げ飛ばした。そして、極端に腰をかがめると、頭を深々と下げた。

「ありがとう！ ありがとう！」

日本人の朝が、アメリカ人のカリン氏から信頼されていくのとは裏腹に、排日移民法ではからずも顕在化したアメリカ人の中の反日感情と、日本人の反米感情は、次第にもつれ合い、さまざまところで矛盾を来し始めていた。

朝の願いははっきりしていた。

誰もが幸福でいられる平和な世の中を作ること——。社会の歪みをもろにくらい、困窮する子供たち。社会福祉とは遠く離れた場所にいる女工たち。こうした人たちのために、朝は社会福祉を学んできたのだった。

そして朝は、学び続ける必要性を痛感していた。

「私は東洋美術や武具のエキスパートになろう」

朝は決意した。それが朝の考える、社会福祉——平和への近道だった。

12

一方で、朝の大学生活は、ますます多忙になった。朝は、修士論文に取り組んでおり、論文執筆と美術館との仕事で、てんてこ舞いの状態だった。

「論文を仕上げるために、全神経を集中する時間がどうしても必要なのです」

朝がカリン館長に訴えると、彼は半ば皮肉な笑みを含んだ目で私を一瞥し、「どのくらいの期間？」と尋ねた。

「少なくとも3ヵ月は……」

朝がおおざおと口にするると、彼はにっこり笑った。

「ならば、毎週土曜日に数時間ここへ来なさい。そして、ギャラリーの周囲をちょっと歩き回りなさい。まるで働いているように周囲から見えるようにね。そうしてくれるなら、今まで通り、1ヵ月100ドルを支払いましょう」

「まあ！ そうしていただけるなら、本当に助かります」

カリン氏は正直なあまり、その振る舞いはしばしば美術館のお偉方に睨まれ、「風変わりな人」という評価を受けていたが、一方で極めて有能であり、寛大な人だった。しかもカリン氏は朝の仕事ぶりを賞賛し、「日本の甲冑のエキスパートである」という評価を業界に喧伝してくれていた。その後、カリン氏は病にかかり、あっという間に亡くなってしまったが、朝の胸に残ったのは、大きくて深い喪失感でしかなかった。

朝は続いて、またもやハワード・マンズフィールド氏の紹介で、メトロポリタン美術館のバッシュフォード・ディーン博士の面接を受ける機会を得た。

コロンビア大学教授でもあったディーン博士は、日本を何度も訪れたことのある著名な動物学者だ。19歳ですでに博士号を取得し、1900年(明治33)に日本に来日。彼の弟子には、日本への進化論の紹介、普及に尽力した動物学者の石川千代松氏、日本の動物学に実験的研究法を導入した東京帝国大学理学部教授の谷津直秀氏、出羽米沢藩の最後の藩主だった上杉茂憲(もちのり)伯爵(貴族院議員)らがいた。ディーン博士によって日本の動物学が始まったともいえる。

第一次大戦のあとをうけ、1920年に国際連盟ができるが、その際、事務次長のひとりに選ばれたのが日本の新渡戸稲造だった。新渡戸は、1900年に英文で出版された『武士道』によって、国際的な名声を得ていた。この『武士道』の中にも、ディーン博士の名は礼儀を重んじる人の例としてその言葉と共に紹介されている。

〈人間の交わりが生んだものの中で最高に成熟したものが礼儀である〉(『武士道』飯島正久訳/築地書館)

ディーン博士もまた、「礼」を愛する人間であり、それは『武士道』と深く繋がっている。やがて氏は、日本の鎧や刀の鐔の世界的コレクターとして名を馳せるようになる。日本に旅行するたびに、日本の生物を研究するだけでなく、甲冑を大量に購入して帰国した。実際、朝が会った時は、コレクターが高じて、氏はメトロポリタン美術館の甲冑および武器・鎧部門の長を務めていた。氏は、同美術館におびたしいコレクションを寄贈していた。コレクションの中には、足利尊氏愛用の甲冑もあり、たまたまメトロポリタン美術館を訪れていた皇室博物館の学芸員、秋山光夫(てるお)氏と後藤守一(しゅいち)氏は、国宝級だと断定した。ちなみに秋山氏はのちに金沢美術工芸大教授も務めた美術史家、後藤氏はのちに明治大学教授となり、登呂遺跡の発掘などに携わった考古学者である。



バッシュフォード・ディーン博士夫妻



足利尊氏 愛用の甲冑
メトロポリタン・ミュージアム所蔵

バッシュフォード・ディーン博士は朝に会うなり、こう告げた。

「あなたには試験を受けてもらわなければなりません。この日本語の本を読んでください。私が印をつけたページを見て、何が書かれているか、話してください」

氏が差し出したのは、日本で発行されている刀剣の雑誌だった。朝は、印のついたページに目を通すと、雑誌を閉じて、英語でおおよその内容を伝えた。

「合格です。私は今まで職探しにくる日本の若い人たちにこのテストを受けてもらいましたが、彼らはいつも日本語訳を書くために『鉛筆と紙をくれ』と言うのです。でも美術館ではすぐに答えが必要なのです」

ディーン博士は朝を別室に連れ立った。ドアを閉め、朝に向け、片目をつぶった。

「さあ、内緒で話しましょう。あなたには1週間に3日間ここで働いてもらいます。それでいくら必要ですか？」

「私はまだ学生ですし、お給料をいただくことはできません。どうぞ額は決めていただけませんか」

「ここは裕福な集団ではないのでね。だから手ごろな金額をとというあなたの申し出には感謝します」と、ディーン博士は穏やかな表情を浮かべた。

「でも、生活するための十分なものをもらうべきです。要望をはっきり言ってください」

「奨学金で学費は払えますが、寄宿舍、食費、本代などで、月に100ドルは必要です」

朝がそう説明すると、ディーン博士は即座に承諾した。

朝がメトロポリタン美術館で任されたのは、日本の甲冑コレクションだった。そして美術館には、

大量の書籍も収蔵されていた。ディーン博士の古書コレクションは、朝がかつて父親の蔵で見つけ、眺めていた本も多数含まれていたが、中には、稀覯本の手書きの写しも含まれ、書籍だけでも非常に価値があった。

ディーン博士の口癖は、「日本語のしっかりした知識があってこそ、日本の絵画、芸術品や文化を理解できる」というものだった。日本語という言葉は、意思疎通の道具を越えたものであり、書かれた文字は芸術にもなりえた。そうしたことを理解するには、日本語と日本文化に通底している必要があった。朝は、英語が堪能で日本語と日本文化に明るいという希有な人材だったのだ。

ある時、ディーン博士は、朝のデスクの上に、一揃いの甲冑を置いた。

「端を小刀で削って、この甲冑の金属が何でできているか調べなさい」

朝は鍔の端を薄く削り、その金属が、鉄か銀か、または合金かを分析した。デザインのモチーフも重要で、モチーフは分類の手がかりとなる。例えば、松の葉とスモモの花の絵柄の周囲に月光を連想させる風景が彫られているもの。鶴が両翼を広げている図柄。デザインは歴史の中で徐々に変化していった。

鍔や刀はアメリカで人気のあるコレクションのひとつで、朝は、コレクターたちから相談を受けることもあった。そのうちのひとり、スミス博士が、朝にこんな疑問をぶつけた。

「これがどういうことか説明してくれませんか？ この刀は1000ドルもしましたが、こちらはたった98ドルです。どちらも人を殺せるものなのに、なぜ値段にこんな大きな違いがあるのですか？」

朝は持ち込まれた刀をざっと見た。1000ドルの刀は、鍔の細工も優雅だった。安価な刀は幅広で、頑丈だった。

「もちろんどちらも血を流させるものですが、刀剣というものはあなたが考えておられるようなものではなく、必要もなく人を殺すものではありません。日本人は、刀剣は身に着けている人に尊厳をプラスするものであり、儀式の用途も持っています」

朝はさらに、高価な刀をつぶさに眺めた。神社の鳥居のように、反りの中心が刀身の中央付近にあるものを「鳥居反り」、あるいは「京反り」というが、この刀はまさにそれだった。三条派の仕事だ。三条派は平安時代に京で興った流派で、最も古い流派のひとつだ。朝は、「渋い」と伝えようとしたが、その単語を英語の中に見つけることができなかった。しばらく考えて、「アンティーク・エレガンス」という表現を思いついた。

「三条派の刀は、アンティーク・エレガンスと言えるでしょう。この刀の中には、上品さがひそんでいます。品位があり、エレガンス。京の将軍と同等の立場、あるいは高貴な貴族が儀式用に身に付けていたものでしょう」

朝は、安価な刀も手に取った。

「これは長州の刀工によるものでしょう。刀身は力強い感情を備えていて、たった98ドルだとしても醜いとか汚い刀身というわけではありません。下級兵士が、実用的な目的のために身に付けていたものです。どちらの刀も、殺傷の道具であり、同時に、持ち主の誇りの一部でもあるのです」

朝は、アメリカにおいて、自分の国の歴史や文化、そしてその中から生まれてきた美に、魅せられていた。

勉学と刀剣だけに、朝は青春を捧げていたわけではない。

朝にも気の置けない友人がおり、気晴らしに遠くまで出掛けることもあった。

朝は親しい友人3人と50ドルずつ出し合って古いダッジのポンコツ車を買った。朝は運転ができなかったが、3人の女友達は上手に運転をした。友達とのドライブは、朝にとっての楽しい思い出の

ひとつだ。

1901年に登場したオールズモビル・カーブドダッシュは、アメリカ初の量産車となり、ヘンリー・フォードが設立したフォード・モーターは、1913年（大正2）に1日に1000台生産するシステムを確立し、自動車は大衆のものへとようになっていく。その一方で、大都市には自動車が溢れ、特にニューヨークの交通事情は、しばしばドライブの楽しさを吹き飛ばした。

ディーン博士の姉、ハリエット・ディーンと、ニューヨークの日本食レストランで食事をした帰りに、朝は彼女とタクシーに乗り込んだ。タクシーは、72丁目の通りで前方の車と衝突事故を起こし、朝は、フライパンの中のはじける豆のようにフロントシートに叩きつけられた。ハリエットを見ると、額から血を流していた。

「どうしてもっと注意深くできなかったのよ？」

朝は、タクシー運転手に向かって叫んだ。

「何の合図もなしに他の車がバックしてきたんですよ、お嬢さん。すみません。しかし心配いりませんよ。保険に入っていますからね」

「そんなこと私の知ったことではないわ。すぐに私たちを救急病院へ連れて行きなさい。友たちはひどい怪我をしているんだから」

病院では一人の若いインターンが冷静に処理を引き受けてくれた。ハリエットは顔を5針縫った。彼女は激しくショックを受けていたが、どうやら心配なさそうだった。

朝は、鼻をしたたかぶつけていたので、鼻骨が折れてしまったのではないかと心配したが、若いインターンは「心配には及ばない」と告げた。しかしその医師が、絆創膏を朝の鼻に押し付けたとき、朝は、顔全体が火で焼かれているように熱くなった。

数日後、メトロポリタン美術館で保険会社の人間と会った。保険会社の説明は、わかりにくいことこの上なかった。しかも病院の治療費を払う気がない。仕方なく朝はぶつけた。

「娘さんをお持ちですか？」

「はい、おりますよ」

「私は遠い日本からやってきた日本の学生です。両親はたいへん心配しております。たとえ事故が起これなかったとしても、もしあなたの娘さんが異国にたった一人でいるとしたら、いつも心配ではありませんか？」

「心配でしょうなあ」

「ならば私も同じ立場ですよ」

しかし保険会社の人間は、それをビジネスの話とは捉えなかったようだ。病院の請求書は、依然として誰が払うのか、宙に浮いていた。

「あなたに一つ提案しましょう。あなたはスマートなお嬢さんだ。もし、ミス・ディーンが500ドルで手を打つと受け入れてくだされば、あなたも同額を受け取るでしょう」

朝は、顔を5針も縫ったハリエットのことを思った。朝の目の下は大きな黒ずんだ傷跡がある。何インチかずれていたら失明したかもしれない。

「私は独身の女性です。顔に傷がついたらおそろしいことになります。私たちはそれであなたを告訴することができるんですよ」

彼は動揺しなかった。

「私のオファーをお聞きになりましたよね。ミス・ディーンによくお話をください」

話し合いの後、朝はその話をハリエット・ディーンに伝えた。

「朝、私は承諾するわ。もしあなたがそれでいいなら。あなたはすぐ日本に出発しなければダメよ。それが一番大事なことなのだから」

朝は、この時、日本に帰る予定があった。これ以上、交渉を長引かせるわけにはいかなかった。朝は渋々、500ドルの提案を受け入れた。

それは1928年（昭和3）のことだった。朝がアメリカの地に降り立ってから6年の月日が経っていた。そしてこれが、朝が渡米して以来、初めての帰国だった。

（つづく）

著者プロフィール：

角山祥道

1969年東京生まれ、埼玉育ち、神奈川・三浦半島暮らし。明治大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程修了。大学在学中の1990年にライターとしてデビュー。以後、インタビュー、書評を中心に活動。手がけた書籍に、『相性』『「0から1」の発想術』『「ドラえもん」への感謝状』など。

<http://japanknowledge.com/articles/blogtoyo/>

※松岡朝物語（仮称）は全14章想定です。今後、当会のHPにも同内容を順次掲載をしていく予定です。

大澤一彰 チャリティーコンサートのお知らせ

■ 10月28日(金) 人気の高い「大澤一彰」氏 チャリティーコンサート再演！！

昨年度も評判の高かったテノール歌手・大澤一彰氏の歌声に、定評ある弦楽四重奏、パイプオルガン、そして日本ハープコンクール1位のハープ演奏者を加えた豪華な共演を、今年も開催致します。皆様とまた感動を分かち合いたいと思います。詳細は同封したチラシをご確認ください。

会費納入のお願い

年会費納入をお願いいたします。子ども達に、より良い日本を残すための当会の活動内容は現在まで高く評価されて参りました。これも皆さまのご理解があればこそでございます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

日本にあるものはオーストラリアには無く、オーストラリアにあるものは日本には無いと言われており、友好を深め、相互協力を推進することが重要な意味を持つ関係にあります。日豪両国の芸術専攻生の教育交流の発展や、オーストラリアやニュージーランドに寄贈した日本画の里帰り展の実現を通して、相互協力関係の深化を図りたいと思いますので、是非ご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 一般社団法人 海外と文化を交流する会
銀行振込 三菱東京UFJ銀行 渋谷支店(普) 0026193 海外と文化を交流する会

会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインヒル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail: official@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>